

## 会話の種類による参加者の配慮の違い —体験談の会話・スピーチ・話し合いの分析をもとに—

中井陽子

### 要旨

本研究では、体験談の会話、体験談のスピーチ、話し合いの会話という異なる会話において、母語話者が何に配慮しつつ会話に参加していたか分析した。分析の結果、体験談の会話では、会話進行・維持、話し手の立場、聞き手の立場、対人関係・雰囲気作りなどの面での配慮が見られた。スピーチでは、語彙・文法、音声・スピード・非言語、構成、内容、時間管理、対人関係などの面での配慮が見られた。話し合いの会話では、内容、時間管理、対人関係などの面での配慮が見られた。このように会話の種類によって参加者の配慮に異なる点が見られることから、そこで求められる会話能力も異なるため、日本人学生や外国人留学生に対するアカデミック・ジャパニーズ教育においても、これらの相違点に留意して、それぞれの能力育成を行っていく必要性を指摘した。

### キーワード

アカデミック・ジャパニーズ、体験談、スピーチ、話し合い、配慮

### 1. はじめに

我々は、日常生活において様々な場面で様々な目的を持った会話に参加する。それぞれの会話を円滑に進めながら参加するには、それぞれ異なった配慮の仕方が必要である。例えば、自身の体験を他者に興味を持たせながら語りつつ、他者の体験の語りを興味を持って聞き、体験談を分かち合うために、会話参加者が協力して会話の場を形成していくための気配りの仕方があるだろう。または、自身の体験をスピーチで分かりやすく興味深く語るために留意することもあるだろう。あるいは、各自の意見を出し合い、対立・調整しながらまとめていくといった話し合いの会話に必要な方略もあると言える。

こうした会話は、それぞれ目指す目的が異なるため、必要とされる会話能力も異なることが予想される。日本人学生や外国人留学生に求められるアカデミック・ジャパニーズ(AJ)の口頭能力も、こうした会話の種類と目的の違いにより異なってくる点を考慮すべきである。例えば、雑談の形で体験談が話せても、それをスピーチとしてまとまった形で話すのが苦手な学生や、自分と他者の意見をぶつけて新たな発見をしていくことに躊躇してしまう学生もいるだろう。または、話し合いの場で意見交換はできるが、何気ない話から相手を知り人間関係を構築していく雑談が苦手な学生もいるかもしれない。こうした会話の種類・目的の違いによる会話能力の発揮の仕方の違いについて、教師も学生も意識的になり、それぞれの能力を磨いていく必要があると考えられる。

そこで、本研究では、AJの口頭能力を考えるに当たり、様々な種類・目的の会話の中から、学生が大学生活でよく参加するであろう体験談の会話、体験談のスピーチ、話し合いの会話という異なるタイプの会話を例として取り上げる。そして、各会話に参加して会話

の目的を果たすために、母語話者の参加者がどのようなことに配慮していたか、参加者の内省データと会話撮影データをもとに探る。この分析結果をもとに、日本人学生や外国人留学生のAJ教育に求められる会話能力の育成の留意点について議論する。

## 2. アカデミック・ジャパニーズの3本柱と会話の種類選定

菅長・中井（2016）では、元留学生の事例から、学生時代に培ったAJが職場でどのように役立っているか分析し、表1のように、AJをAJ①、AJ②、AJ③の3つの柱に分けている。大学教育の終わりまでに育成すべきAJ能力は、社会人として職場で活躍するための能力とも直結していると言える。そして、菅長・中井（2016）は、職場で活躍するためには、言語要素・技能（AJ①）だけでなく、問題発見・分析・解決能力（AJ②）が欠かせないとし、さらに、円滑に職務を遂行する上で、人間関係構築のためのコミュニケーション力（AJ③）も必要であると述べている。

表1 アカデミック・ジャパニーズの3本の柱（菅長・中井2016）

AJ①	大学等の勉学に必要な日本語とスキル：大学での授業（講義等）に必要な日本語の言語要素および技能
AJ②	高等教育を通して養成される能力：問題発見・分析・解決能力、論理的な思考力
AJ③	人間関係構築力：他者とつながるコミュニケーション力・ネットワーク作りなど

AJ①②③にはそれぞれ4技能が関わっていると考えられるが、その中でも特に学生が大学生活の中で様々な会話に参加していく能力が必要だという点から、本研究では会話能力に焦点を当てる。そして、体験談の会話、体験談のスピーチ、留学の意義の話し合いの会話という3種の異なる種類・目的の会話を取り上げる。これは、これら3種の会話には暫定的に以下のような点で、AJ①②③における会話能力がそれぞれ求められると考えたためである。ただし、実際には、1つの会話にAJ①②③が複合的に現れることも予測される。

- (1) 体験談の会話（AJ③）：体験談の会話では、自分達の体験を共有して共感・理解してよい関係を作っていく能力が必要である。体験談を話すという課題は設定されているものの、何か結論を出すことが求められるわけではない。そのため、楽しい会話の場を作りながら、互いの経験を分かち合い、互いを知るといった「人間関係構築のためのコミュニケーション」を行う雑談の会話に近いため、特にAJ③の例として取り上げる。
- (2) 体験談のスピーチ（AJ①）：スピーチでは、自身の見聞きしたことを人に的確に伝える能力が必要である。独り言とは違い、話し手は聞き手を意識して話し、聞き手も視線やうなずきを用いて参加し、双方向性があるため、会話の種類の一つであると言える。スピーチは、単独で話し、表現・内容・談話構成を考えながら聴衆に分かりやすく話すといった言語要素・技能の面が強いため、特にAJ①の例として取り上げる。
- (3) 留学の意義の話し合いの会話（AJ②）：話し合いの会話では、協働作業や会議などで時間制限のある中で効率よく成果を出していく能力が必要である。物事をどのように捉えるかを考え、それを意見として出し合い、その関連や相違点を検討しながら調整して、1つのものとしてまとめていくといった「問題発見・分析・解決能力、論理的な思考力」に関連する会話だと考えられるため、特にAJ②の例として取り上げる。

本研究では、これら3種の会話に具体的にどのような違いがあり、参加者は何に配慮して会話に参加しているのかを探る。これをもとに、日本人学生や外国人留学生へのAJの会

話能力育成の中身をより具体的に検討できるようになることを目指す。

### 3. 調査概要

日本語母語話者の会話参加者4人に集まってもらい、3種の会話データ（体験談の会話、体験談のスピーチ、留学の意義の話し合いの会話）を収集した。会話データは留学の体験談と留学の意義について話す設定にしたため、健太（仮名、以下同様）に留学経験のある友人を集めてもらった。その結果、修二と奈美は大学の同じゼミだが、由利は修二と奈美と初対面という関係になり、学年も様々になった（表2）。

表2 会話参加者の背景

仮名	性別	身分／年齢	専門（留学国）	普段の会話への参加の仕方 (本人の自由記述)
1. 健太	男性	修士1年生 20代前半	スペイン語学 (スペイン)	聞き手になることが多い。
2. 修二	男性	学部4年生 20代前半	通訳・翻訳(イギリス、 オーストラリア)	よくしゃべる性格。
3. 奈美	女性	学部4年生 20代前半	ドイツ語科、通訳・翻訳 (ドイツ、イギリス)	一生懸命話を聞こうとして疲れて しまい、会話することに苦手意 識がある。受け身で話を聞いている ことが多い。
4. 由利	女性	修士1年生 20代半ば	ラテンアメリカ地域研究 (フランス、スペイン)	コミュニケーションをとることが 好き。

以下、3種の会話データ収集の詳細を示す。各参加者には、会話データ収集依頼の際、自身の留学の体験談と留学の意義について話してもらおうという点を伝えておいた。

- (1) 体験談の会話 (AJ③)：参加者4名が自身の留学体験について一人ずつ語り、それを聞きながら随時質問やコメントをしていくという会話を行ってもらった（全19分間）。会話の制限時間は設けず、特に話す順番や司会進行の役割分担なども決めず、参加者の自由に任せた。
- (2) 体験談のスピーチ (AJ①)：(1)体験談の会話を行った後に、参加者4名が個別に自身の留学経験で良かったこと、大変だったことなどについて、カメラの前で即興でモノローグのスピーチをするという形で行ってもらった（一人2～4分程度）。なお、参加者には2、3分程度で話してもらおうように指示したが、特に時間制限は設けていなかった。スピーチの聞き手はカメラ撮影者及び筆者の2名であった。
- (3) 留学の意義の話し合いの会話 (AJ②)：(1)と(2)の会話を行った後、「留学の意義とは何か」について、参加者4名がそれぞれポストイットに思い付いたことを書き出した後、10分間という時間制限の中、互いにそれを見せ合いながら説明し、ポストイットの記述が似ているものごとに分類して、ポスターに貼り付けていってもらった（全11分30秒間）。なお、それを見せながら、学部生に向けて留学の意義について発表し、留学に行きたい気持ちにさせるという目標を掲げた架空の設定で行った。

いずれの会話もビデオ撮影し、背景シート（基本情報、普段の会話への参加の仕方）、会話感想シート（会話の全体的な印象、相手の印象、うまく行った点・難しかった点など）に自由記述してもらった。その1週間以内に会話ビデオを見ながら、各参加者に個別にフォローアップ・インタビュー（FUI）を2時間程度行った。FUIでは、中井（2002）を参考に、会話時に考えていたこと、発話の意図、違和感を持った・面白いと思った瞬間と

その理由、沈黙・笑いの理由などを聞いた。そして、FUIデータと会話データを文字化し、各参加者の内省と実際に会話で何が起きていたのかという実態の両面から分析した。

#### 4. 3つの会話での配慮の分析

(1)体験談の会話、(2)体験談のスピーチ、(3)留学の意義の話し合いの会話において、互いに参加者が何に配慮しながら会話に参加していたかについて、参加者4人の会話感想シートの記述、FUIでの語りの内省データ、および、会話例をもとに分析する。

##### 4.1 体験談の会話での配慮 (AJ③)

(1)体験談の会話では、表3のように、会話進行・維持、話し手の立場、聞き手の立場、対人関係・雰囲気作りの面での互いの配慮が挙げられていた。この中には、配慮したものの困難に感じた点も含めた(以下、表4、5同様)。表中の記述は、参加者の順に示す。

表3 体験談の会話での配慮 (会話感想シートの記述要約)

会話進行・維持	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まとめ役をやろうとしたが、あまりうまく役割を果たせなかった。(健太)</li> <li>・沈黙しないように話題探しに必死だった。(健太)</li> <li>・誰がどの話題をどれくらい話すのかなどの共有がされておらず、話題の切り替えが困難だった。(健太)</li> <li>・4人会話だと相手の質問や反応で話題が行ったり来たりし、仮に言い間違いや沈黙があっても誰かが場を繋いでくれた。(健太)</li> <li>・会話の切れ目などで間ができた時、次の話題にスムーズに持っていくことは、私からはできなかった。(奈美)</li> <li>・始まりと終わりのタイミングとまとめ方が難しかった。(由利)</li> <li>・4人で会話するので、サーブ、レシーブのリレーが途切れないよう、かつ盛り上がるよう相手の意見を理解した上で次の会話に繋げるようにした。(由利)</li> </ul>
話し手の立場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の話に興味を持ってきている印象があり、話しやすかった。(健太)</li> <li>・気さくに自身が話す割合が多かった。(修二)</li> <li>・思ったことを思ったままに自然に話せたと思う。(奈美)</li> <li>・他の人がたくさん質問して会話をリードしてくれたので、話しやすかった。話の構成を考えず、内容に集中できた。(奈美)</li> </ul>
聞き手の立場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分とは異なる体験をしている人の面白い話を聞くことができた。(修二)</li> <li>・スムーズに話が進み、質問も自然とできた。(修二)</li> <li>・みんな全然違う経験をしていて面白く、興味を持って聞いていた。(奈美)</li> <li>・目を見て話してくれたので、とても印象が良かった。(奈美)</li> <li>・一人一人の話す内容をしっかり目を見て理解しようとしていた。(由利)</li> <li>・あいづちを入れ、相手を否定することなく、受け入れた上で会話をさらに発展させる方向に持っていった。(由利)。</li> </ul>
対人関係・雰囲気作り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初対面同士が多く、互いに気を遣い雰囲気をよくしようとしていた。(健太)</li> <li>・明るく各自の海外経験について話し合うことができた。(修二)</li> <li>・和やかに会話できたと思う。(由利)</li> </ul>

会話例(1)は、奈美が自身の留学体験について語っている部分である(文字化資料中の「//」記号は、発話が重複された箇所を示す)。表3「話し手の立場」の奈美の記述にあるように、この部分について奈美は、皆が質問をして会話をリードしてくれたため、話の構成を考えずに内容に集中して話せたとしていた。そこで、会話例(1)では聞き手の立場の参加者による質問の発話に「質問」と記した。

まず、1で健太が奈美を次話者に指名する進行の発話を行い、奈美が話し手として話し出す。奈美は、2と4で留学先のことでロンドンの話をした後、次に何を話せばよいか分からなくなり、少し間(2.5秒沈黙)ができてしまったという。しかし、由利が5、7で学部留学だったのか、何を勉強したのかを質問したため、奈美は話そうと思っていたことを思

い出し、8で話を続けられたという。さらに、9と11で修二が質問をすることで、奈美は10と12で話を発展させている。そして、21で修二が大学によって勉強のさせ方や内容が違うという評価的発話を用いることで奈美の話をまとめ、そして、健太にどこに留学していたのかを聞くことで次話者として選択し、奈美の話を終了させて健太の話を開始させる進行を行っている。ただし、この修二の進行の仕方については、他の3人の参加者から、まとめ方がよく分からなかった、奈美の話が急に終わって拍子抜けした、修二が進行役をする予想しておらず、次に自分(健太)が話す番だと思っていたため不意を突かれたといった感想がFUIで聞かれた。このように、体験談の会話では、聞き手による指名、質問、あいづち、評価的発話などで、話し手の話の展開を支えつつ、お互いを知り、人間関係を構築しようとする配慮が見られると同時に、会話の進行に難しさも感じていたと言える。

会話例(1)体験談の会話(奈美の留学体験)

1 健太：じゃあ、続いて奈美さんに聞きたい//んですけど。	<b>進行(次話者選択)</b>
2 奈美：私はイギリスに1年間?大学の方に、ロンドンじゃなくて北部の方に行ったんですけど。	
3 全員：{笑い}	<b>笑い</b>
4 奈美：ちょっと一応、ロンドンが人気だから{笑い}(健太：ふーん。)、言うんですけど。 (2.5秒沈黙)	
5 由利：学部留学ですか。	<b>質問</b>
6 奈美：学部留学です。3年生の時、3年生の秋から1年間。	
7 由利：何勉強してたんですか。	<b>質問</b>
8 奈美：えとー、色々取れ、私が留学に行こうと思ったのは、今通訳を専攻していて、英語-日本語の通訳を専攻していて、自分の英語力に自信がなかったから、だからその目的が英語力を上げたいっていうのだったんで、何か特定の勉強したい分野があったわけじゃなかったから、幅広く取ったんですけど、あの一番集中的に取ったのは史学、(由利：うーん。)を取りました。{笑い}これが//結構大変でー、	
9 修二：史学っていうのは、まあ言える範囲でどんな感じの歴史的なことを?	<b>質問</b>
10 奈美：歴史は、ヨーロッパ史を中心に。(修二：ふーん。)やっぱり歴史っていうとヨーロッパがまずその、過去で中世、近代でこう、ぐっと引っ張って来たっていうようなものがあったから、あとキリスト教文化もそうだし、だから史学をやりたいなと思って、で、そのイギリスっていうヨーロッパの中の国で歴史を勉強するっていうことに意義があるかなと思って、だからそこら辺を中心に。	
11 修二：日本で勉強する、ま、いわゆる世界史っていうの、まあやるじゃないですか。その学んできた歴史と、その、実際あつちで勉強した歴史って何かやっぱ違いあった?	<b>質問</b>
12 奈美：違いは、まず第一に私が、その高校時代にやった世界史ってすっごい薄っぺらいなって思って{笑い}(健太・修二：ふーん。)、そんなもんじゃなくてやっぱりその、文献を読まなきゃいけない、だから、その一次文献とか二次文献とかそういうのをすごい読んで行く中で、「あ、いろんな意見があるんだな」とか、いろんな歴史があって、この背景にはこういうものがあってとか、武器の種類とか、これがこの時期にどう使われてたとか、そういうことも勉強したりしたから、もう全然深さが違ったかなあ。(中略)	
21 修二：なるほど、まあ一言で大学って言っても、そういうスタイルが違うんだね。(奈美：うん、うん。)すごい。えっ、そういえば健太くんって、どこに行ってたんだっけ?	<b>進行(評価的発話・まとめ・次話者選択)</b>

4.2 体験談のスピーチでの配慮(AJ①)

次に、(2)体験談のスピーチでは、表4のように、語彙・文法、音声・スピード・非言語、構成、内容(話の要点)、時間管理、対人関係の面での配慮が挙げられていた。

表4 体験談のスピーチでの配慮(会話感想シートの記述要約)

語彙・文法	・文法的に正しく話そうとした。(健太)
音声・スピード・非言語	・はっきりと分かりやすく話すことを意識した。(修二) ・目線がきょろきょろしてしまい、早口になってしまった。(奈美) ・一方的に区切りなくしゃべらないようにスピードに気を付けた。(由利) ・伝えたいことを言う時に目線を向けるようにした。(由利)

構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で話の流れを考えなければならず、責任や負担が重かった。(健太)</li> <li>・うまくまとまりがある形で話せなかった。(修二)</li> <li>・話が矛盾しないように、話の流れに気を付けた。(奈美)</li> <li>・一人だと話の展開を自分で考えなければならず、「心」から話している感じではなく、むしろ「頭」で話している感じ。(奈美)</li> <li>・筋が通った話し方になるように意識した。(由利)</li> <li>・段階を踏んでまとめようとした。(由利)</li> <li>・時系列で話そうとした。(由利)</li> </ul>
内容 (話の要点)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が言いたいことが言えたと思う。(奈美)</li> <li>・一番言いたいことが言えていたか心配。(由利)</li> </ul>
時間管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチの時間をうまく管理することが難しかった。(修二)</li> </ul>
対人関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人で話すため、丁寧な日本語で話した。(修二)</li> <li>・相手に届けるという気持ちで話すようにした。(奈美)</li> <li>・一番言いたいことが伝わっているか心配。(由利)</li> </ul>

会話例(2)は、奈美が留学体験について話しているスピーチである。表4「構成」の奈美の記述にもあるように、奈美は、スピーチの際、自分で話の流れをどのようにしたらいいか注意を払いながら話していたという。これは、他の参加者の質問などによって話の展開が方向づけられていた会話例(1)の体験談の会話とは違う点である。スピーチで特に話ができなかったと思った部分は、第3段落目で「何を勉強したか」について話していたのに(行動説明)、直前に話していた「なぜイギリスにしたか」に話が戻ってしまったところ(イギリスを選んだ理由)だという(下線部)。このように、スピーチは全て自身で話の展開に責任を持たなければならない点が難しいようである。一方、自身で話を方向づけられるため、自分が言いたいと思っていた「自分の殻を破り、自信が持てた」ことをスピーチの最後に言えた点(主張)は満足していたという。この点は、会話例(1)の体験談の会話では語られていなかった。そして、自分が言いたいことが言えたという点は、スピーチの聞き手に届けようという思いがあったからだとも考えられる。

会話例(2)体験談のスピーチ(奈美の留学体験についてのスピーチ)

<p>私は、イギリスの大学に、大学3年生の秋から、4年、3年生の秋から4年生の秋まで、留学、1年間留学をしていました。</p> <p>で、イギリスを選んだのは、それまでずっとイギリス英語に憧れていたっていうのと、あと、歴史にすごく興味があって、ヨーロッパが今まで、昔、世界を引っ張ってきたっていうことがあったので、ぜひヨーロッパで歴史の勉強をしたいっていうのがあったからです。</p> <p>で、えっと、イギリスで何を勉強したかという、私は実は大学、日本の大学では通訳を専攻しているんですけども、そのために英語力を上げたいっていうのもあって、その、英語圏のイギリスを選んで、(イギリスを選んだ理由)で、イギリスで通訳のコースは取ることができなかったんですけども、じゃあ折角だから自分が日本の大学では勉強していないことを勉強しようと思って、史学と、あと哲学を少し、あの一、授業をとって勉強しました。で、すごく、現地のイギリス人の学生と混じって授業を受けなければいけなかったんで、すごく大変なこともたくさんあって、例えば、史学の授業では、史学なんてやっぱり資料をたくさん読まなければいけなくて、毎回毎回ひーひー言いながら一生懸命たくさんの資料を読んで行っていました。(中略)</p> <p>留学をして、あの、実際に良かったなって思うことが、英語力を上げるっていう目的が達成できたことだと思います。日本にいと英語を話すのが恥ずかしかったり機会がなかったり、話さなくてもいいやって{笑い}終わってしまうことが多いんですけど、でもイギリスに行くとやっぱり自分から話していかないと生活ができないし買い物もできないし何もできないので、もう、嫌でもしゃべらなきゃいけないっていう環境に自分を置けたことはすごく大きなことだったと思います。自分の殻を破ることもできましたし、そういうふうに1年間しっかりと自分一人で英語で生活をしてきたってことによって、その一、自分にすごく自信が持てるようになったと思います。</p> <p>以上で話を終わります。</p>	<p><b>行動説明</b></p> <p><b>イギリスを選んだ理由</b></p> <p><b>行動説明</b></p> <p><b>主張 切り上げ</b></p>
---	--

### 4.3 留学の意義の話し合いの会話での配慮 (AJ②)

最後に、(3)留学の意義の話し合いの会話では、表 5 のように、内容 (意見の交換・対立・調整)、時間管理、対人関係の面での互いの配慮が挙げられていた。

表 5 留学の意義の話し合いの会話での配慮 (会話感想シートの記述要約)

内容 (意見の交換・対立・調整)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4人の体験談の会話の時よりも対立が多く、語調が強めで緊張した。(健太)</li> <li>・皆、自分の意見に自信があり、容赦なく他の人に発言していた。(健太)</li> <li>・それぞれおもしろい意見があり、独自の新しいアイデアを出せた。(修二)</li> <li>・アイデアを出し、皆の意見をまとめるのが難しかった。特に、互いの発言で意図した意味や物事の捉え方の違いにより、カテゴリー分けするのが難しかった。(修二)</li> <li>・反対意見が出て議論をする場面もあり、深い話ができ、自分の考えもちゃんと伝えることができ、理解もしてもらえた。(奈美)</li> <li>・体験談の会話とは違い、一人一人の考えをまとめる作業だったので、どう意見を言うか、相手がどう出るか、どう妥協点を探すかが難しかった。(奈美)</li> <li>・互いの考えや経験・背景が違い、ディベートのようになったが、互いに何を思っ書いて書いたのか、理由・背景をしっかりと理解しようとしていた。(由利)</li> <li>・似通ったことを書いていても実際に伝えたいニュアンスは全く別で、見ただけでは分からないことを説明することで理解し合えたことが良かった。(由利)</li> </ul>
時間管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タイムキーパー的な役割を果たすことができた。(健太)</li> <li>・時間の制限がある中、長く説明し始める人がいた時に、どう会話を切って作業を進めるかが難しかった。(奈美)</li> </ul>
対人関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不和が生まれないように必死だった。(健太)</li> </ul>

会話例(3)は、4人の参加者間で留学の意義について意見の対立が起き、緊迫した状態になり、意見を調整しようとしている部分である。4人は言語学、社会言語学、社会学など専門や経験の違いから、表5「内容」の修二と奈美の記述のように、留学の意義の捉え方や表現方法が異なり、互いに理解し合った上で意見をまとめることに困難を感じていた。

まず、1で奈美が留学の意義として「自然な英語が身に付いた」というポストイットを見せ、話題を提示している。2で健太がこれに同意している。その意見を聞いて自分とは違うと思った由利は、18で皆の専門が語学かどうか確認する。由利は、自分は普段から社会現象を調べる研究のために語学をツールとして用いているが、他の人は語学自体を勉強しているという立場のようなので、そもそも留学の目的も異なってくると思い、一度整理するために確認をしたという。そして、24で由利は「私は全然語学はツールでしか思っていないから、そういうふうにあんまり思わない」と自身の対立意見を表明する。この部分について、奈美は、素直な意見を言ってくれたのが嬉しく、全体の空気が凍っていると感じつつも、25で笑顔で、本当の英語とは本当のコミュニケーションスタイルのことだと自身の立場を説明したという。だが、26で由利は、「ちょっと違う」と述べ、78で留学を通して何語であろうと相手と話したいという気持ちを持つようになったのだと自身の立場を説明する。これに対し、奈美はどのように分類したら由利が納得してくれるか妥協点を考え、79で「違いを越えてって感じる」と新たな分類を提案し、健太も制限時間を気にしつつ80で「価値観が変わってって感じる」と抽象化した分類を妥協点として提案し、対立意見をまとめようと努力する。これに対し、由利も81で同意を示し、82で奈美が由利にポストイットを貼る場所を提案し、意見の対立が収束に向かう。この場面では、奈美が積極的に自身の意見を出し、対立意見を調整しようという姿勢が見られた。この会

話の前に行われた体験談の会話では、奈美は聞き手に回ってあいづち・うなずき・笑いなどで反応するだけの消極的な参加で、相手に質問をして話題を進めたり次話者を指名して司会者的役割を担ったりする積極的な参加はしなかった。そのため、この奈美の参加の仕方の変化に健太も驚いていたと FUI で述べていた。この点に関して奈美は、雑談などの会話では目的が明確ではないため、反応の仕方や焦点の当て方が分からず苦手意識があるが、目的があると会話に参加しやすくなると述べていた。

会話例(3)留学の意義の話し合いの会話(留学の意義に関する意見の対立)

1 奈美：{自分のポストイットを貼り付けながら}自然な英語が身に付きました。	<b>話題提示</b>
2 健太：あー、まあそれはでかいですね。自然なっていうその教科書に載ってるやつじゃない。(中略)	<b>同意</b>
18 由利：え、3人は語学を勉強してるんだっけ。(1秒沈黙)語学が専門っていうか。	<b>確認</b>
19 奈美：今の。(由利：うん。)は、語学？(中略)	
24 由利：なんか私は全然語学はツールでしか(奈美：あー。)思っていないから、そういうふうにあんまり思わない。確かに本当の言語勉強するよりはどっちかっていうといかにコミュニケーションをとるか、(奈美：うーん。)いかに人が思ってることこっちがくみ取って向こうにも分かってもらえるかっていう、そこを重視だから、ほんとに言語はツールでしかない(奈美：うーん。)から、それよりはコミュニケーション(奈美：あー。健太：うーん。)って何なのか。{自分のポストイットを持つ}	<b>対立意見表明</b>
25 奈美：でも、{自分のポストイットを指しながら}この自然な英語っていうのは語学っていうよりも、その、コミュニケーションスタイルとしての(由利：あー。)本当のコミュニケーションスタイル、(健太：うん。)向こうの人がどういふのを好むのかとか、言い方もそうだし、(由利：あー。)微笑みながら言葉とかっていうのを//全部含めて、私の、この自然なっていうのは。	<b>自身の立場の説明</b>
26 由利：あー、ちょっと違う。(中略)	<b>対立意見表明</b>
78 由利：あの人何語しゃべってるとかって意識することもあるかもしれないんだけど、そういうんじゃない、本当にあなたと話したくてっていう、あなたの意見が聞きたくてっていうのを意識するようになった。(奈美：あー。)あなたっていうふうに見るようになった。	<b>自身の立場の説明</b>
79 奈美：違いを越えてっていう感じ。	<b>妥協点の提案</b>
80 健太：価値観が変わって//っていう括りでたぶん置いたほうが僕はいいと思います。	<b>妥協点の提案</b>
81 由利：そう、そう。	<b>同意</b>
82 奈美：価値観が変わる括りにしましょう。{由利のポストイットを貼る場所を指しながら}こっち。	

## 5. おわりに

以上、体験談の会話、体験談のスピーチ、留学の意義の話し合いの会話という形態や目的の異なる会話で参加者がどのようなことに配慮しながら会話に参加していたかについて、参加者の内省と実際の会話データから分析した。

まず、体験談の会話では、会話進行・維持、話し手の立場、聞き手の立場、対人関係・雰囲気作りなどの面での配慮が見られた。特に、誰がどのような順で話すのかを決め、一人ずつの体験談を開始・終了させるための配慮が働くと同時に、その方法は母語話者同士でも難しさを感じる場面も見られた。また、聞き手による指名、質問、あいづち、評価的発話などで話し手の話が方向づけられ、支えられて発展していた。そのため、それぞれの留学経験を和やかに聞き合っていた。

一方、体験談のスピーチでは、語彙・文法、音声・スピード・非言語、構成、内容、時間管理、対人関係などの面での配慮が挙げられていた。特に、体験談の会話と違い、スピーチでは話し手自身が話の展開に責任を持つため、内容がずれないように配慮する必要があった。だが、自分が一番言いたいことを存分に言えるという利点もあった。

さらに、留学の意義の話し合いの会話では、内容、時間管理、対人関係などの面での配慮が見られた。ここでは、ポストイットに留学の意義に関する意見を書き、類似した意見に分類してポスターを作成するという課題が設定されていたため、互いの体験やそれに基づいた意見の共通点・相違点を検討し、その結果、対立が生じた。そのような緊迫した対立状態の中、体験談の会話では消極的な参加だった奈美が話し合いの会話では積極的に意見を出し、対立意見を調整しようとしていた。それは、話し合いの会話の中では、ポストイットの意見を分類するという課題が明確に与えられており、その目的に向かって、お互いの意見を出して議論しつつ、妥協点を探し、問題解決をするために、積極的に参加しやすかったからではないかと考えられる。

このような3つの会話の特徴の違いから、参加者が配慮することが異なることが明らかになった。ここから、各会話で必要とされるAJの会話能力も異なってくるものと考えられる。体験談の会話では、聞き手・話し手として会話を円滑に進めて人間関係を構築していくといったAJ③能力が求められる。こうした対人関係に関する能力は、人と人がコミュニケーションを取る全ての会話で基本的に必要なものだと考えられる。そのため、体験談のスピーチでも、AJ③の対人関係に関する能力を基礎としつつも、自身で内容・談話構成を行っていく言語・スキルといったAJ①能力も磨く必要がある。そして、話の要点・流れに配慮して論理的に話すといったAJ②能力も必要であろう。さらに、互いに意見をぶつけ合い調整するといった留学の意義の話し合いの会話では、主に、問題発見・分析・解決能力であるAJ②能力が必要とされると言える。奈美の事例から言えることは、AJ②能力育成のためには、時間制限を設けたポスター作成のような視覚的にも成果物が見える明確な課題を設定し、参加者全員が互いの共通点・相違点を探り、問題解決をしながら意見を深めていけるような仕組み作りをすることが重要だと考えられる。

なお、本研究では主に会話に焦点を当てて分析したが、AJ①②③は4技能を通した総合的な大学生活全般の中で培われていくものである。今後はこういったよりマクロな視点からの分析も必要である。また、今後は、母語話者と日本語学習者の会話データとの違いも探り、より具体的なAJ教育のあり方を議論したい。

(中井陽子なかいようこ・東京外国語大学)

**付記** 本研究は、平成28～30年度科学研究費(基盤研究(C))「会話データ分析の手法を用いたインターアクション能力育成のための教材開発」(研究代表者:中井陽子)(16K02800)の成果の一部である。

## 参考文献

- 菅長理恵・中井陽子(2016)「学生時代に培われたアカデミック・ジャパニーズと職場での活動のつながり—理系・文系の元国費学部留学生の事例から—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第8号, 55-64. <<http://academicjapanese.jp/dl/ajj/ajj8.55-64.pdf>> (2017年2月1日)
- 中井陽子(2002)「初対面母語話者/非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係—フォローアップ・インタビューをもとに—」『群馬大学留学生センター論集』第2号, 23-38.